

## 第9章 世界ユダヤ人会議

世界シオニスト機構は、ドイツ・シオニスト連合がナチズムとの提携・協力を追求するのを認め、連合の指導者たちは、しきりに国外でのヒトラー・ドイツの商品販売につとめ、またそのスパイ役さえ買つて出たが、ユダヤ人の間に破局感が広がるのは欲しなかつた。パレスティナのシオニズム運動でさえ、世界的に破産状態のユダヤ人から資金を募ることに、ドイツ一国の犠牲者のための金集めとが同じとはまず考へていなかつた。ヒトラーがハーヴァラ協定を廃止し、シオニスト連合を非合法化するのではないかとおそれるあまりヒトラーと闘うことを嫌つたソコロフ、ヴァイツマンは、ヒトラーを抑止しようとする列強の同盟を夢想したが、これは空しい幻想に終始した。ヒトラーと闘うことを辞さなかつたゴルトマンやワイズ、世界シオニスト機構の中で彼らに従つていた人びとは、機構総裁を交代でつとめたソコロフ、ヴァイツマンが対ヒトラー闘争にいつともきまつて無関心あるいは反対なのを思い知ることになつた。しかしヒトラーの権力がますます増大していったために、より戦闘的なグループは世界ユダヤ人会議をひとつのユダヤ人防衛組織として確立することを余儀なくされた。

ゴルトマンもワイズもシオニズム運動には深くコミットしており、ゴルトマンは一九三二年の予備会議にはどんな同化主義者を招待することにも反対した<sup>(1)</sup>。ということは圧倒的多数派ユダヤ人の招待に反対することを意味した。さらに一九三五年、世界シオニスト機構総裁の地位を再びヴァイツマンが占めうる権利にあえて異議を唱えるつもりもなかつた。にもかかわらず世界シオニスト機構は、新しい主導権追求の動きには断固反対した。こうした動きがパレスティナから世界ユダヤ人のほうへと精力をそらしてしまうことをおそれたからである。ヒトラーの政権掌握から約一年後の一九三四年二月、当時なお世界シオニスト機構総裁をつとめていたソコロフは、世界ユダヤ人会議開催に反対していることが報じられた。

今年夏に予定されていた世界ユダヤ人会議を招集することが果たして賢明かどうかについての疑念が、世界ユダヤ人機構総裁ナホム・ソコロフから表明された。……このシオニストの古参闘士は、世界ユダヤ人会議の問題が論じられた昨年夏のジュネーヴ会議で、パレスティナ問題が世界ユダヤ人会議のプログラムに含まれるべきか否かについてある疑問の声があげられた事実は、問題の討議をめぐる会議が招請されたときに不一致・党派闘争が起る兆候を示すものであろう。……ソコロフ氏はひとつの代案を提示している。それはユダヤ人の自己防衛用の組織構築のためにあらゆるシェード、人里離れた保護地を求めるものであり、熟慮され慎重に定式化されたこのような組織計画の実行は、同化主義を自認する者を除き、あらゆるユダヤ人集団を包括する組織となるであろうから、はるかによいものをもたらすとソコロフ氏は信じている。

ソコロフはまた、広範な地域から代表されている世界ユダヤ人会議では確実になされるとふんでいた、ハーヴァラ協定への攻撃を、やはりおそれていたので、会議の開催を遅らせようとした。ステイブンは、ワイズはこれに応戦して次のように述べている。

もしジュネーヴの会議が、パレスティナ・ドイツ移送協定に反対する決議を採択すれば、世界ユダヤ人会議への支持が無くなってしまうという警告が我々に対してなされた。かかる恫喝を私はおそれない。ユダヤ民族は、エーレッツ・イスラエル（ユダヤ人国家創立に向かうパレスティナ）への導きを受け入れる準備ができているが、それは命令や脅かしによるものではない。あらゆるユダヤ人の利害と命令・脅かしが衝突する場合には、後者は受け入れがたい。<sup>(3)</sup>

166

ワイズにとつては苦しい闘いであった。ワイズはかつてはソコロフと似た路線に従って考えていた時期もあった。しかしながら、パレスティナをユダヤ人の生活の最もポジティブな面といくら考えていても、ヨーロッパ・ユダヤ人をおびやかしている危険よりもまずシオニズム運動を優先するというほどに、ワイズは割り切つて考えることができなかつた。

ある種のシオニストが、ただエーレッツ・イスラエルのみに自分は関心をもっていると言いたがる点は非常によくわかる。パレスティナは最重要の地位を占めている。私は、数年前にはじめて「最重要」という言葉を使った者である。パレスティナがユダヤ人の期待の中では最重要の地位を占めているものの、ユダヤ人たる私は、ガルト（特に迫害の激しい地域でのユダヤ人追放）に無関心であることはできない、と言うべき勇氣をもっているときには、「最重要」という言葉を引つ込めなければならなかつた。もしエーレッツ・イスラエルおよびその強化と、ガルトに対する防衛とのどちらかひとつを選ばなければならないとすれば、その時にはガルトが消えてなくなればならない、と私は言うのである。しかし、結局ガルトの運命に見舞われた人びとを救えば救うだけ最終的にそれはエー

レッツ・イスラエルのためになっているのだ。<sup>(4)</sup>

世界ユダヤ人会議の運動はソコロフが反対したにもかかわらず力を増し続けた。ナチの圧力は大きすぎたから、ユダヤ人大衆は運動がいささかでも発展することを望んだ。そしてワイズが一九三五年の世界シオニスト会議でハーヴァラ協定を心進まぬままに是認したとき、世界ユダヤ人会議は世界シオニスト機構からようやく正式の認可を受けた。しかし、世界シオニスト機構内部で世界ユダヤ人会議に対する熱心な支持はさしておこらなかつた。世界ユダヤ人会議には反対の立場であつたシカゴ『ジューイッシュ・クロニクル』は、防衛組織構想に対する真剣な関心の欠如を正確に記述していたが、それは一九三六年五月になつてからのことである。第三帝国が始まつてからほぼ三年も経過していたのであつた。

ミズラヒ（宗教シオニズム運動）やユダヤ人国家党の個々の指導者は会議を信じていなかったし関心ももつていなかった。……ハダサ（アメリカ婦人シオニスト機構）もその問題で覚醒させられることはなかつたし、アメリカ・シオニスト機構執行委員会のメンバーを選んだ選挙は、圧倒的多数が世界ユダヤ人会議に反対であること……を明らかにした。<sup>(5)</sup>

右翼が敵意をむき出しにしていたが、世界ユダヤ人会議は敵に向かつていかねばならなかつた。今や人民戦線の時代が到来していた。大災害の波に見舞われるなか、社会民主党とスターリニスト共産党は、反ファシズムでは統一戦線を組む必要をようやく学んだ。シオニストも、「ユダヤ人」の統一戦線に相当する流れに追いつかねばならなかつた。さもなければユダヤ人労働者の中の小支持グループさえ失いかねな

かつたからである。殊にポーランドでは、ユダヤ人労働者は人民戦線の考え方に影響を受けていた。ワイズやゴルトマンに対する労働シオニストの支持は、右翼の動きに打ち克つ十分な力量をそなえていたが、世界ユダヤ人会議が突如真正の人民戦線に変貌しようになったまさにその時に、会議の運動は挫折する運命に見舞われた、というのが歴史のパラドックスであった。

### 「反ファシズム闘争独自のセンター」

アメリカ共産党は、世界ユダヤ人会議の指導者が運動内部でその下部の誠実なシオニスト大衆をしてパレスティナよりもナチの脅威に対して真っ先に関心を振り向けさせるには何の障害もないと考えていたので、会議の後援を決定した。しかし、親アラブのアメリカ共産党を認めることはワイズにとって問題外のことであった。ヒトラーに対する闘争は重要な闘いであったが、パレスティナとシオニズムは、それ以上に重要な問題であった。ワイズが発刊していた『コングレス・バレットイン』（会議通信）は共産党を運動に参加させることをはっきり拒否する以下のような一文を掲載している。

反セム主義とファシズムに対する闘いは会議の議題における主な争点の一つになるであろうが、世界ユダヤ人会議が扱う問題は、パレスティナの建設、あらゆる国でユダヤ人の宗教的文化的自由を獲得する闘争を含むものとなる。アメリカ・ユダヤ人の共産党員が、あらゆるユダヤ人の共同の努力の中に自らの道を見出そうとしている兆候を示すものは、反ファシズム闘争独自のセンターである。……『モーニング（モルゲン）・フライハイト』は、ユダヤ人共産党員の参加を問題にする労さえ惜

しんでいる。

世界ユダヤ人会議は一九三六年八月にようやくジュネーブで創立会議を開いた。親共産党のアメリカ代表は、最後にはフロアでの闘いにおいて承認を得ることを期待して出席したが、その甲斐はなかった。会議はナチ反対のためのボイコット決議を通過させたが、決議を実行に移す真剣な努力を全く払わなかった。ヴァイツマンのアメリカにおける代理で、アメリカ・シオニスト機構議長であったルイス・リップスキーは、会議開催案に不承不承でしか同意しなかった。ヒトラーに対する本物の反対行動をとることは、リップスキーと彼の支持者たちが受け入れられる心づもりの全くの埒外にあった。『ワールド・ジャーニー（世界ユダヤ人）』の一特派員は、会議がおこそうと考えていた反ナチ行動からリップスキーがいかに逃げようと腐心したかについて以下のように報じている。

全般的ボイコット決議は……満場一致で採択された。……しかし決議に実効性を与えるにはどうするかという問題が審議の対象になったとき、反対がそれなりに功を奏し始めた。委員会は、ボイコット推進特別課を設けるよう要求する決議案を作成していた。……ルイス・リップスキーによって率いられた、このいく人かのアメリカ人代議員たちの間では強い異議が出され、……責任ある当局が、提案に熱心でないのは明らかで、私には当局が提案に実効性を与える気がほんとうにあるのか、どうにも疑わしく思われる。

さらに続けてこの傍聴者は、会議について「その方法でも混乱してしまい、会議の実現をユダヤ史の曲

がり角になしえたかもしれないのに、指導部の心意気といったものがひとかけらも感じられない」と述べている。

『ワールド・ジュリー』のこの暗い描写はまさにあたっていた。これは主としてプロのシオニスト指導者からなる一種の秘密会議であった。参加者は、真剣にボイコットを組織する、あるいはヒトラーと闘うために他にもできることをすべてやる、といった大衆ではなかった。反ナチのキリスト教徒のみならず、共産党をも含む同化主義ユダヤ人との統一行動なくしては、彼らはボイコットないし他の方法によってもナチスに打撃を与えることはできなかった。スターリニストとの共闘を拒否したのは、ソ連の体制に敵対するためではなかった。シオニズム運動はソ連で禁止され、ヘブライ語はユダヤ人大衆の現実の生活には全く適合していなかったが、ソ連のユダヤ人大衆は、ソ連を反セム主義体制とはみなしておらず、むしろその逆である、と考えていた。トロツキーがナチの手先であるというスターリンの告発を吟味するジョン・デューイの調査委員会に参加を要請されたステイブン・ワイズは、それを断った。トロツキーはスターリンを反セム主義者と呼んでいたが、ワイズがいうには、それがあまりにも明らかにまちがっていたので、トロツキーの言った他のすべての言表も同様に信じられないものになっていた。ユダヤ人問題を解決するには支配階級をあくまで信頼してきたこれまでの立場から、ワイズたちは、大国の同盟を、ヒトラーに対抗できる唯一考えられる武器とみなしていたのである。彼らの国の支配階級の中の後援者たちとスターリンの間の同盟を熱望していたにもかかわらず、アメリカ・ユダヤ人会議のメンバーは、経済的急進左翼ではなかったから、アメリカ共産党とかかわりあいをもつことは全く考えなかった。そうした動向に加えて親アラブの共産党の路線も、アメリカ共産党との共闘という構想を全く排除させることになった。世界ユダヤ人会議に政治的リアリズムが欠けていたのは、世界ユダヤ人の現実生活の中でシオニズムがも

っていたマージナルな性格に由来していたのである。シオニストが遠く離れたパレスティナに向けての活動に打ち込めば、それだけまたユダヤ人大衆の現実的闘争に対するかかわりあいをより希薄にすることになった。街頭での大衆運動が至上命題とされるようになってきたとき、世界ユダヤ人会議は、こうした闘争をおこなう望みも経験も、さらにはそこから学ぼうとする意思もなかった。

一九三六年の世界ユダヤ人会議の時から三九年の独ソ不可侵条約（スターリン「ヒトラー条約」）締結にかけて、アメリカ共産党の党員は増加して九万名となり、傘下の組合員数も百万をこえる一つの組合組織をもつにいたった。アメリカ共産党はワイズのアメリカ・ユダヤ人会議ないしアメリカ・シオニズム運動と比較して政治的にははるかに重要な存在であった。共産党とシオニズム運動の間に大きな相違が存在したことはたしかである。それぞれに制約も多かったし、ヒトラー打倒のためにはボイコットなどですまなかったことも明らかであった。二つの勢力の間に同盟が成立していればアメリカのユダヤ人社会を再活性化しえたであろう。しかもユダヤ人以外の多くの反ナチの人びとが、共産党員やユダヤ人とともに運動に参加したであろう。このような状態が果たして実際に効果をもったか否かはまた別の問題であるが、世界ユダヤ人会議が共産党を共闘の戦列に加えるのを拒否したことが、ユダヤ人の反ヒトラー闘争に計り知れないダメージを与えたことは間違いない。絶望的な状態にあったユダヤ人の統一欠如が、シオニズムの犠牲になってしまうもうひとつの悲劇を生みだしていくことになった。

叢書・ユニベルシタス 705

# ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著

芝 健介 訳

